

# 隠れ水俣病

<7>

## ＝＝＝＝＝＝ 自らへの告発

熊本大神経精神科講師の原田正純医師が、水俣病とかわりあいを持ったのは三十八年。水俣病患者の七〇割に見られる神経症状を観察するため、熊本大神経精神科から派遣され、水俣病患者の診察をしたのが始まり。た

## 医師の良心

から水俣病研究者としての歴史は、それほど長い方ではない。しかも、たびたび現地を訪れて本格的に水俣病と取り組んだのは四十三年からだから、それからすれば、本人も驚くところ

研究した医師である自分自身の責任を痛感しました」と原田医師はいう。

「新米」なのである。しかし、その新米が熊本だけで百人を超すという、水俣病博士たちをしのいで、水俣病患者の患者救済で説明者になったのは、原田さんほど患者救済に入り込み、現状を知っている者がいないためだ。

「三十八年のころは、市や保

健所が集めた患者をみて、それでコト足れりとしていました。患者たちについては、大学の偉か先生、の一人にすぎなかったのです。四十三年患者家族をみて回った時、ひどいショックを受けました。こんなひどい人が十年間なんの救済もされていなかったと知って。まず、水俣病を

ど、水俣病の原因がわかった段階で本格的な実態調査、一斉検診をやるべきでした。ボク自身

＝＝＝＝＝＝  
不十分な疫学調査  
＝＝＝＝＝＝  
熊本の水俣病患者の認定がむずかしいのは、新潟と比べて、汚染地域の実態調査がほとんど行なわれていないためだといわれる。新潟の場合は、汚染地区民に対して魚を多量に食べたかどうかという調査、毛髪水銀濃度調査が完全に行なわれているから、審査会ではこれをもとにして症状を見、他の病気を排除して患者を認定することができる（むつともこつした審査会の認定のやり方に対して、いわゆる消去法であって、積



水俣病患者の症状を説明する原田医師（〇印）二月九日の新潟水俣病調査会（人前）

極的な認定とはいえないと見る意見もある。

船本の調査会は、こうした基礎調査がないばかりに、いきなり臨床診断が覆ねられ、疑わし

# 「実態を知らぬ医師」

## 原因究明に終わった熊大研究

### 若手学究の批判と自責

疫学調査や、一斉検査が行なわれたのは、現時点では、いささか不忠誠だが、原因究明が何よりも急がれた当時の事情、奇病騒ぎを大きくしたくない患者家族や多発地区住民のなかからすれば、やむを得ない面もあった。新日窒水俣工場や日本化学工業協会などの中傷や妨害の中で、病因をつきとめた熊大水俣病研究班にそれ以上を苛むのはないものねだりというべきかもしれない。

「たしかに当時としては、原因究明で精いっぱいだったと思う。ただ、当時は研究の分担がうまく行なわれず、ムダが多かったことは反省すべきだ。一現在水俣病で死亡した人々の遺体発掘調査をしている公衆衛生の若い学究は指摘する。

きは認定せず、の立場をとるを得ないという面もある。奇病といわれ、一時は伝染病騒ぎもあった水俣病の基礎的な

三十二年から三十四年にかけての熊大の水俣病研究班がやり

残した水俣病の実態や、水俣病認定患者のすべ野にある不整形患者の追跡、あるいは水俣病に汚染しながらも発病に至っていない不顕性患者の発掘などについて、いま熊大では第二次水俣病研究班とも呼ぶべき綜合研究体制づくりを急いでいる。

#### 第二次研究班編成

このきっかけは昨年十月、アメリカの水俣汚染会議でミネソタ州メイヨ医大のL・カーランド博士が武内教授に実態調査研究の資金提供を申し入れたことだった。新しい研究班は病理、公衆衛生、衛生、内科、小児科、神経科に、眼科、耳鼻咽喉科を含めた総合的なものになるという。

また果群を母体とした「水俣病支援・公費をなくする県民会議」も昨年六月県に対する一斉検査要請が入れられなかったため、独自に医師団を結成、二月

末から多発地区での検査を始め、患者家族を中心にすでに八十人を診察、このうち水俣病の疑いありとした二十人近くが水俣病の認定を申請している。「私も県民会議の医師団に参加していますが、正直言つて、これだけでは何もできません。熊大が動かなければどうしようもないのです」

原田医師は水俣病を告発する会の水俣病研究会員として、審査会を批判したりすることもあるが「でもやっぱりボクはこれまで水俣病を研究してきた当事者なわけです。他の大学の会員みたいには、歯切れがよくない」と苦笑する。

「水俣病でなければ、私の病気は何ですか。先生私の病名は教えちゃださう」未認定患者たちの素朴な訴えに胸をえぐられた一人の医師の呼びかけは、いまようやくその波紋を広げようとしている。

#### メモ

◇新下水俣病の実態調査 阿賀野川沿岸住民 四万七千人中、二万人について魚獲取屢、自覚症状などについて個人票を作成、三百人について手量水銀量を測定、多発地区住民百五十二人をうち百二十人について詳細な検査が行なわれた。四十五年、再検査によって百二十人